

## 相手意識をもちながら積極的にコミュニケーションを図ろうとする子ども

— ～ My original book ～ 伝えようマイストーリー —

### 1 単元のねらい

自分が英語を使って作った絵本の読み聞かせを、下学年に行うという相手意識や目的意識を設定することで、必要な英語の語彙や表現を工夫しながら相手に伝えようとする。

### 2 授業の構想

#### (1) 子どものとらえと資質・能力について

本学級の子どもたちは、小学3年生の時より年間17時間の外国語活動を行っている。3時間から4時間の単元を組み、単元の終末には慣れ親しんだ英語の語彙を使ってコミュニケーション活動を行う活動を設定してきた。また、“Hi, friends!”を基にして各学年の実態に応じた単元の工夫を行っている。次期学習指導要領では“Hi, friends!”を基にして3,4年生の単元が組まれる。本学校園ではこの3年間、3・4年の活動が5・6年の学習指導要領で示される内容にどのようにつながっているのかを意識して単元を組んできた。本単元は“Hi, friends! 1 Lesson4 I like ～.”の食べ物の語彙、“Hi, friends! 1 Lesson7 What do you want?”の“What do you want?”の使用表現、“Hi, friends! 1 Lesson8 I study Japanese.”の曜日の語彙につながる。高学年の活動を意識しながら3・4年生でたくさんの語彙に触れておき、6年生で行うコミュニケーション活動をより円滑に行えるようにしている。また、3・4年生の発達段階にあった活動を仕組むことで自信をもってはっきりとした声で英語を発話したり、英語を使って相手に伝えようとしたりする子どもの姿が見られるようにしている。そして、単元構成を組むときには、常に相手意識や目的意識を明確にした活動を入れている。

- |   |       |
|---|-------|
| 1 時間目：今日は楽しかったので、3年生に見せるときも楽しくできるとよいと思いました。           |       |
| 2 時間目：今日は楽しかったので、3年生に見せる日が楽しみになりました。3年生がスマイルになるとよいなあ。 |       |
| 3 時間目：いろいろな動物の発音が簡単でした。もしかして英語になれた？                   |       |
| 4 時間目：3年生に読み聞かせをするために英語になれて言えるようになった。                 | (児童A) |

上記のふりかえりは、1学期にブラウンベアの絵本を基にして色と動物の言語材料を入れたオリジナルブックを作り、3年生へ読み聞かせをする活動の毎時間のふりかえりカードに書かれたものである。自らが学習活動を振り返ることにより、主体的な学びにつながるよう取り組んできた。

#### (2) 資質・能力を育むために

この単元では、“THE VERY HUNGRY CATERPILLAR”の絵本における英語のフレーズの繰り返しの表現を参考にしながら、自分の考えたオリジナルブックを作り、ペア学級の3年生に読み聞かせをする設定をした。単元導入時に、単元の終末の活動は3年生に“THE VERY HUNGRY CATERPILLAR”を基にしてオリジナル絵本を作り、英語で紹介する活動を行うことを知らせる。相手意識や目的意識を単元の導入時にもたせたり、1時間1時間のふりかえりの視点にしたりすることで、様々な活動が単なるゲームで終わるのではなく、常に「3年生に読み聞かせを行うためには・・・」という追求意欲を高めていくことにつなげたい。

また、“THE VERY HUNGRY CATERPILLAR”の絵本は身近な食べ物や曜日の語彙，“～,but he was still hungry.”という繰り返しのフレーズがあり、英語をインプットしやすく、アウトプットもしやすいと考える。他教科との関連という視点からも3年生のときに、昆虫の育ち方や食べ物について学習してきたことや、昆虫が大好きな3年生には興味をそそる題材であると考え。

さらに、今回の授業では資質・能力を身に付ける一つの手立てとして、小中交流授業も取り入れる。単元の終末を意識させることや目的意識をもたせることはもちろんであるが、中学校との交流授業を4時間目に取り入れることで、慣れ親しんだ語彙や表現を使った自己表現を豊かなものとしたい。本年度の4年生の子どもは、オリジナルブラウンベアのお話をグループで作成し、学級みんなで3年生に対して発表することを行った。学級で協力して読むことはできていたが、工夫して相手にしっかり伝えられるはずの学級の実態から「もっとこうできたはず」「もっと伝わったはず」と自分たちの力が100%3年生に伝わったとは思っていない。しかし、この思いは次へとつながるよい機会ととらえている。本来なら4年生同士でどのようにしたらより3年生に伝わるかについてアドバイスをし合う時間を設定するが、本年度は中学生の読み聞かせの単元と合わせて、4年生の読み聞かせを中学生に対して行い、中学生にアドバイスをもらう。また、中学生の読み聞かせを聞いた上で、下学年へどのように読み聞かせを行ったらよいのかじっくりと考え、アドバイスを参考にしながらよりよい活動が行えるようにつなげていきたい。

### 3 展開計画（全4時間）

時	主な学習と具体的な学習・内容	◇願う子どもの姿
1	○活動の見通しをもち、曜日や食べ物の英語での言い方に慣れ親しむ。 ・相手意識や目的意識を子どもと一緒につくる。 ・絵本の読み聞かせを聞きストーリーの流れを知り、曜日や食べ物の英語を言ったり聞いたりする。	◇“THE VERY HUNGRY CATERPILLAR”のお話を聞いて単元の見通しをもち、相手意識や目的意識を明確にし、曜日や食べ物の英語を言ったり聞いたりする姿
2	○曜日や食べ物の英語に慣れ親しむ。 ・曜日の歌を歌う。 ・ラッキーカードゲームを行いながら“What do you want?”“I want ～, but he was very hungry.”の表現や食べ物の語彙を言ったり聞いたりする。	◇曜日や食べ物の英語を言ったり聞いたりする姿 ◇使用表現に慣れ親しんでいる姿 ◇必要な語彙に慣れ親しんでいる姿
3	○オリジナルブックを作成するために、使用表現に慣れ親しむ。 ・What do you want?”“I want ～.”の表現を言ったり聞いたりしながら食べ物のカードを集める。 ・曜日の歌を歌う。 ・AとBグループに分かれて欲しい食べ物のカードのやり取りを行う。	◇自分が欲しい食べ物のカードのやり取りしながらオリジナルブックを作成している姿 ◇やり取りの使用表現に慣れ親しんでいる姿
4	○中学生との交流を行いながら絵本の内容をよりよく伝えるための工夫を考え読む。(小中交流授業) ・中学生の絵本の読み聞かせを聞く。 ・自分たちの絵本を読む。 ・アドバイスをもらいよりよく伝えるための工夫を考える。	◇中学生のお話をしっかりと聞き、読み聞かせのよさに気付く姿 ◇絵が見えるように指で指し示しながらはっきり読むことがわかりやすいと気付く姿 ◇3年生が喜んでくれるように読みたいと願う姿

絵本の一部の作成・絵本の紹介は短時間学習で行う。週3として計算し1時間扱いとする。

## 4 授業の実際

### (1) 願いや疑問を抱くことができるような課題や教材との出会い

子どもが主体的に英語を学ぶためには相手意識や目的意識を明確にもつことが大切である。「伝えたい」「話したい」という気持ちを高めるためには教材の出会いが大切である。本単元では、単元の終末に3年生に対して読み聞かせを行う活動を設定したが、あえて指導者側が相手意識や目的意識を提示するのではなく、子どもたちと一緒につくっていった。そのために、指導者側に単元と単元のつながりや、前単元での子ども達の実態をとらえておかなければならない。本単元を設定した理由として、先述しているオリジナルブラウンベアの経験がある。きっと子どもたちは3年生に伝えたいという思いが出るであろうと予想し単元の構想を考えた。

まず、“THE VERY HUNGRY CATERPILLAR”の絵本を読み、“THE VERY HUNGRY CATERPILLAR”のページの作りと同じ小さな冊子を見せた(図1)。そのあとに真っ白なページを見せこれから自分たちでオリジナル絵本を作るのだと伝えた。すると子どもたちからは、「わ〜!」と喜びの声が上がった。続いて、誰に伝えたいかと聞くと「お家の人」と答えた。こちらが意図する「上級生」や「3年生」はなかなか出てこなかった。



図1：読み聞かせの様子

1学期の読み聞かせでうまくいかなかったことが強く心に残っているようだった。そこで3年生の理科も担当している外国語活動指導者より、「3年生は虫が大好きで、1学期の時にどんな虫が好きかアンケートをとっているが、「大好き虫ベスト7を当ててみよう」をクイズにして提示した(図2)。シルエットクイズ、ジェスチャーゲーム、3ヒントクイズを一緒にやり、英語の虫の言い方をインプットしていった。そのような活動をする中で、「はらぺこ〇〇のオリジナルブック」を作成し、3年生に読み聞かせしようということになった。この相手意識や目的意識を子どもと一緒につくるという活動は時間がかかるが、丁寧にやることで、主体的に英語を学んでいくスタートとして大切にしたい時間である、また、この活動を通してどのような英語の語彙が必要になっていくのかを子ども達から引き出すことができた。必要な英語の語彙として、「虫」「食べ物」「曜日」があがった。子どもに考えさせることで、これから学習する英語の語彙が明確になる。フレーズについてはこちらから提示した。“What do you want?” “I want ~.”と言いながら自分が読み聞かせを行う際に必要なカードを集めていくという活動を行い、本を作成していくという見通しも、1時間目にもった。授業を進めていく上で1人1冊ということから、きょうだい学級の3年生のペアに読み聞かせを行うことに決まった。「自分も楽しまない、相手も楽しんでもない」

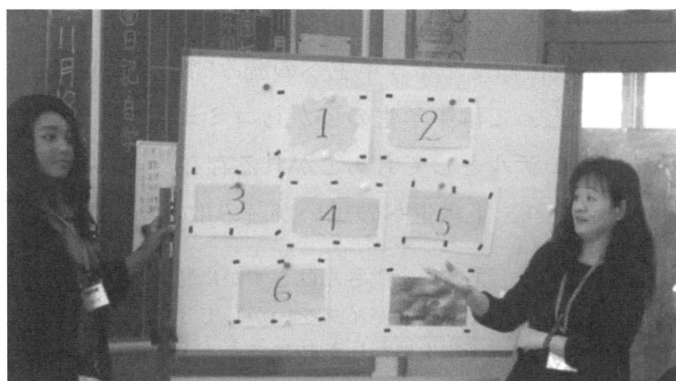


図2：好きな虫ベスト7クイズ

と子どもたちは考え、子どもたちの中には、ペアの3年生に「どんな虫が好き?」と聞きに行き、絵本の内容を決めた子どももいた。このように外国語活動の第1時間目に子どもと目的意識や相手意識をつくる授業は今後の主体的な学習へつなげるための大切な一歩であった。以下のふりかえりは導入時のものである。

今日は虫の英語や果物の英語を覚えました。カマキリの英語を覚えて本を作っていきたいです。今日の読み聞かせは3年生に伝えるように読みたいです。  
(児童B)

このふりかえりは学習していく内容を計画しよりよいものにしていきたいという願いが表れている。また以下のふりかえりからはこれからの活動に願いをもっていることが読み取れる。

今日は曜日や虫の言い方を知りました。すらすら言えるようになって、3年生に伝えたいと思います。本を作るのが楽しみになりました。  
(児童C)

## (2) 小中交流授業と短時間学習



図3：中学生への絵本の読み聞かせ



図4：中学生の絵本の読み聞かせ

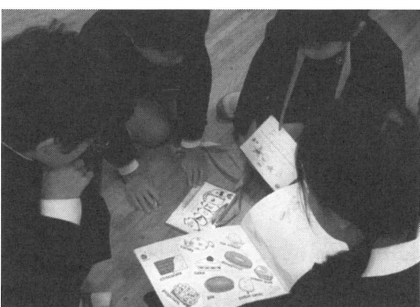


図5：中学生からのアドバイス

よりよい読み聞かせになるかについて中学生からアドバイスをもらうことをめあてとした(図5)。このようにして、双方向がよりよいコミュニケーションを考える場面とした。中学生は4年生にわかりやすく、クイズを出したり、質問したり、絵を指さしたり、ジェスチャーしたりしながら読み聞かせを行った。4年生はこの単元の最終目標である3年生への読み聞かせに向けて、中学生からアドバイスをもらっていた。4年生にとっては中学生の姿からコミュニケーションの在り方を教わったであろう。また、英語を使うモデルとしてもあこがれる存在であったといえる。以下のふりかえりからは、中学生へのあこがれ、下級生への思いが読み取れる。

今日は中学生さんと絵本を読んでもらったり聞いたりしました。中学生さんはさすがに発音がすごいです。そしてわたしたちにやさしくアドバイスしてくれました。このアドバイスをいかして3年生さんに読みます。次にきっと3年生さんも読み聞かせをしようと思うので4年生になった時にできるようにしてあげたいです。  
(児童D)

このように、単元の途中で小中交流授業を入れていくことは子どもにとっても有効であったと考える。

## ② 短時間学習

単元の最終ゴールである4年生の「My original book」伝えようマイストーリー」では、単元名のように一人一人が自分の作成したオリジナルブックを3年生にしっかりと伝えることができた。短時間で行ったが伝えるのには十分な時間であった。3年生にとっても短時間で集中して聞ける時間配分でもあった。中学生からのアドバイスをいかしながら3年生に上級生として英語を使って伝える4年生は誰しも自己有用感に浸っていた。3年生からは賞賛の言葉もらい、1学期に行った読み聞かせの後とは全く違う表情であった。今後、この短時間学習は教科化に伴い重要な時間となる。高学年は週2時間になり、1時間+短時間の学習をどう行うかは学校カリキュラムマネジメントに任されている。今回このような活動を行ったことで、15分をどのように使っていくか1つのモデルになったと言える。

今日は3年生さんに読み聞かせをしました。中学生さんにアドバイスしてもらった、ゆっくり読む、絵本を指さして読むということがしっかりできて、3年生さんが楽しんでくれました。ぼくもとても気持ちがよかったです。  
(4年生 児童E)

今日は4年生さんがオリジナルブックを読んでもくれました。はらぺこあおむしを英語で読み聞かせてくれました。おもしろかったし、発音もよくてすごかったです。話を聞いていてますますおなかが空いてきてしまいました。わたしたちも4年生になったら1つ下の学年にするんだなあと思いました。しっかり見習ってその日をむかえられるといいな。  
(3年生 児童F)

異学年交流を通し、英語をツールとして子ども同士がつながった学習であった。

## 5 おわりに

今回の授業の導入では目的意識や相手意識を子どもと一緒につくっていった。主体的な活動を行うためには、単元の見通し、1時間の見通し、さらに外国語活動にある先のものを見通すことが欠かせない。外国語活動の慣れ親しみの活動において、この目的意識や相手意識が薄ければ薄いほど、ただのゲームになり英語を使って「伝えたい」「聞きたい」という活動が曇ってしまう。今回、1学期のことも踏まえて子どもと一緒に単元のゴールをつくり上げていく過程を大事にしたことが、3年生に読み聞かせを行うという最終ゴールに一人一人がしっかりと到達することにつながった(図6)。また、途中で小中交流授業を入れることで、さらに「もっとよりよく伝えたい」という高まりももつことができた。今回行ったこの単元はたくさんの人

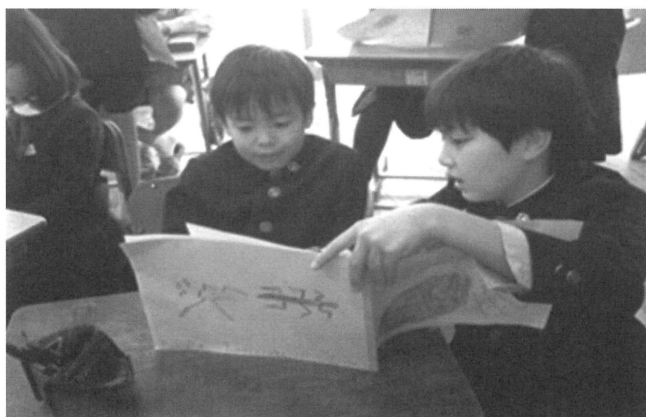


図6 3年生への読み聞かせ

との交流によって成り立っている。言葉で人と人がつながる場面をしっかりと意識し、リンクさせていくと子どもたちにとって豊かなコミュニケーション活動の場になるということを実感した。そのため、9年間を見通した外国語のカリキュラムの系統性、指導法の連続性を小中で意識していくことが大切である。

(文責 加藤 君江)